

森林美学の源流を訪ねて

小池孝良(こいけ たかよし)

はじめに

「森林美学」は 1991 年に復刻された新島・村山の著書の題名である。復刻の労を執られた林政学者の小関隆祺氏(以下敬称略)が、1918 年に刊行された当時のベストセラーの現代的意味を次のように述べている。「物質文明への依存性が高まる中で人類の生存基盤を担う森林の存在意義が主張され、本来、主観的に理解されがちな森林の美の創造を、経験科学として施業を通じて達成する我が国独自の理念を、今再び学ぶ機会を得る」ことである。

木材生産を至上とする考え方から、2001 年に出された森林・林業基本法では森林の多機能を発揮させる考え方が前面に出された。先の林業基本法は、発布された 1964 年当時の社会情勢を基礎に設定された。産業政策論を主張し、将来の予測成長量を掲げて増伐を行い、針葉樹一斉造林を推進した。林野庁の論客を本来の森林経営学の立場から論破できなかったと思われる。そして「広義の法正林」(伐採しても造林さえすれば、生産は維持される)の考えを導入し、美しい数理モデルによって森林管理の目標と手順が示された(内藤 2003、藤原 2009)。

一方、経済の国際化の中で、生活環境やスタイルが変わり、森林の持つ多機能の中でもレクリエーションや風致(自然界のおもむき)、温暖化低減などの環境緩和機能への期待が高まってきた。これらを踏まえ、国家百年の大系ともいえる森林・林業基本法の示す方針は、ようやく本来の林学や森林科学の姿へと回帰したと私は感じる(木平 2006、藤原 2009)。

温故知新の言葉通り、森林美学の果たす今日的役割を学び、「美しい森」造りを行う意義を皆と共有したい。このように考えていたときに、その源流ともいえるドイツ・バイエルン州のミュンヘン工科大学へ私は招聘された。ドイツでは正課としては廃

止された森林美学が、日本では長らく講じられてきた背景を紹介する機会を得た。この体験を基礎に、森林美学の理念を継承している伊藤精悟(信州大学名誉教授)(伊藤 1991)と清水裕子(森林風致計画研究所)らとともに森林美学について、私どもの考え方を紹介したい。

森林美学とは—ドイツでの流れと現状—

18 世紀までのドイツは、農地や牧場の乱開発によって森林の荒廃が進んでいた。そして、これを復旧することが緊急の課題であった。これを背景に「森林美学」と和訳されたテキストは 1885 年に刊行され、2、3 版がそれぞれ 1902、1911 年に出版された。著者の H. von Salisch(ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュ)は、ドイツ・シレジア地方(現ポーランド南西部)のユンカー(地主貴族)であった(Salisch 1902, Cook Jr. と Wehlau 2008)。そして、約千ヘクタールの自らの森林における経営の実践経験を基礎に Forstästhetik(直訳:人工林の審美)を執筆した。

そこには、ドイツ古典主義末期から主にロマン主義思想からの影響があった。特に、科学者・詩人であったゲーテの「自然は常に正しく、誤りはもっぱら私の側にある。自然に順応することができれば、事はすべて自ずからにして成る。」との名言が息づく。ターラント高等山林学校(後にドレスデン工科大学)の校長を務めた H. Cotta(コッタ)は、「森づくりは半ば科学、半ば芸術である」との森林観を唱えた。そして、自然の摂理と調和した森林の管理・経営論を具体化した。コッタの考えを展開させ、「森林美」の概念を森づくりの基礎として、「森林美学」の学問領域を創設したのが、弟子のザーリッシュであった。

森林美学は、功利(木材生産など)を追求しつつ「技術合理の森林は最高に美しい」、「美しい森林はもつとも利用価値が高い森林」とした。ここで「技術合理」とは、自然との「調和」を前提とし、「利用価値」とは、いわゆる環境の保全も含む多様な森林の役割を意味するという。ザーリッシュは「経済林の審美」の中で、自らの森林経営から都市近郊の森林美までをも対象とし、経済的利益と美の調和を主張した(筒井 2009)。

19 世紀初頭のドイツでは、理想とする森林状態とされる法正林(毎年の成長量に見合う分の立木

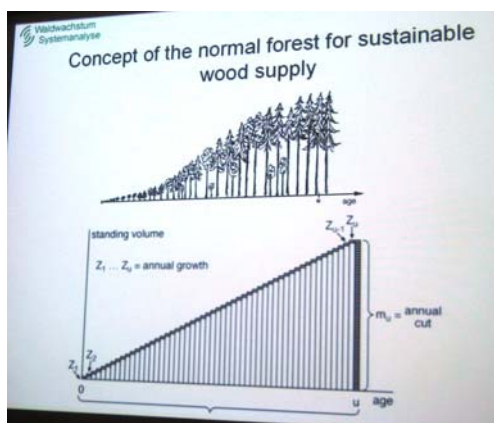


図-1. 法正林の概念図 (ミュンヘン工科大・夏期大学、森林計測学・計画学講義資料 2007)

を伐採、植林することで持続な森林経営が実現させる森林)を目指して経営することを至上とした(図 1)。現有する森林資産から将来どれだけの利益が持続的に得られるのかという観点から考えた場合に、裸地に借金をして造林した場合の最適輪伐期が土地純収益説という。一方、法正林を所有している林家にとっての最適輪伐期が森林純収益説である(田中和博 私信)。

田中(1996)は循環型社会の評価基準としてPVFP(present value of future profits: 将来期待される純収益の現在価値)を提唱し、PVFP を用いれば、土地純収益説も森林純収益説も統一的に説明できるとした。

ザーリッシュの森林管理は土地純収益説の考え方にたった。必然的に短伐期で効率よく収穫できる一斉林型を目指すことになる。一方、森林純収益説では長伐期と混交林化もしやすいと考えられるが、彼は、あくまで林内美の創出を意図した森林経営を試みた。

拡大解釈のそしりは免れないが、前者では、土地当たりの収益を最大化することに主眼があり、必然的に木材生産を中心とした収益を追求することになる。土地価の高い場所では森林以外の利用へ転用されることも有り得る。一方、森林を土地と一体化して考えるなら、後者では、森林の存在自体に価値があると考え、森林自体の保全管理を求めることになる。

ザーリッシュは木材生産に関しては、土地純収益説の立場でありながら、森林美の追究を行うことで、結果として森林の存在自体に価値をおく森

林純収益説をも満たした森林管理を追求したことになると私は考えている。19 世紀後半、自然の摂理を重視し択伐施業と天然更新を追求したミュンヘン大学の造林学者 J.K. Gayer (ガイヤー) は森林純収益説の立場であり、考え方は山岳国スイスで受け入れられた。その後、新島の師の1名であった H. Mayr (マイヤー; 明治政府の招聘学者で後にミュンヘン大学造林学教授を勤めた) は、日本全国の森林植生を視察し、各地に保護林の候補地を示した(黒松内町 1993)。ガイヤーの影響下で A. Möller (メラー) は「健全な森林有機体の持続」を追求し、恒続林思想を提案した(今田 1934)。彼は森林を単なる樹木集団としてだけではなく、多くの生き物が共同して生息する有機体(=生態系)の考え方を示した(山畑 1984)。

森林美学の展開—日本での事例—

ここでは、戦前における森林美学の歴史を、林学(主に森林経営・造林・森林工学)を中心に紹介する(清水 2006、清水ら 2006)。

森林美学の考え方は、1896 年頃、明治期にドイツで学んだ林学者(東京帝大の林政学の川瀬善太郎、造林学の本多静六、国立公園の祖とされる田村剛 1929)によって我が国へ紹介された。なお、森林美学の訳語は、「森林美の保続」の著者ステツェルに師事した本多静六が与えたという(清水ら 2006)。

東京に公園林と荘厳な森(日比谷公園、明治神宮など)を造成した本多静六(ミュンヘン大学へも留学)や本郷高德の「社寺の林苑」にその影響を感じる。それは、自然の摂理を十二分に理解して森造りを行った点であろう。例えば、1920 年に鎮座祭が行われた明治神宮の外苑には、トベラ、ネズミモチ、サンゴジュなど鉄道からの大気汚染に強い木を配置している。また、森林の立地を踏まえ、遷移の流れに沿って郷土種と考えられる常緑広葉樹の天然更新による森林維持を構想した。また、参道の落葉落枝は、神宮の職員によって掃き集められ林内へ戻すことによって生態系の物質循環が維持されている。

はじめにも触れたが、「森林美学」の教科書は 1918 年に刊行された。この本は札幌農学校森林科の初代教授であり北海道帝国大学にて森林保護学や造林学を講じた新島善直が高弟、村山醸

造(後に昆虫学者であり、“ナラ枯れ”の菌の媒介をするカシノナガキクイムシを命名した)と共著で執筆した。ドイツ留学を終えて帰国した新島が、ドイツ林学会で正課とされた Forstästhetik (人工林・経済林の美学)の内容を受け、我が国の実情に合った形で執筆した。その基礎は、村山の卒業研究「北海道有用樹木ノ美的價値ヲ論ス」(1916年)にあるという。このため、樹種特性に関する詳しい記述が本書の特徴である。

新島・村山の「森林美学」が示す指針は、いち早く生態系の概念を取り入れ、子孫のための森林管理を提唱したメーラーの恒続林思想へと統合した(今田 1934)。現在、「森林美学」は北海道大学農学部森林科学科でのみ講じられており、多くの大学では美術・造園系の講義で一部紹介されているのが現状である(伊藤 1991,塩田 2008)。

ドイツの森の今—バイエルン州の事例—

2007年、森林美学発祥の地とされるドイツの森林を歩く機会を得た。このきっかけは、Markus Schaller 博士(シャラー氏・ミュンヘン工科大学 TUM)によって森林美学の源流「復活」を知らされたことによる。2006年から担当した森林美学の講義の準備に少なからず腐心している私は、年若いドイツの友人に愚痴をこぼした。彼は、私と同じく林野行政の関係機関から大学へ出向したこともその背景にあった。

シャラーにミュンヘン大学 OB の Wilhelm Stölb (ステルブ) が 2005 年に Waldästhetik (自然林の美学；小池の訳) を出版したことを知らされた。彼の著書は出版されてから 3 年間で約 2.6 千冊が売れたそうだが、ドイツ語圏での販売の限界という。出版のために早期退職し、約 3 年間にわたってミュンヘン工科大学で学び、執筆した。その原動力は、日々損なわれていく身近な自然林の保護を訴えたかったからだという。テキストの副題は、「森林科学、自然保護、そして人々の魂のために」、とある。ここに、現代の「森林美学」の思想があると感じた。

私はステルブと直ちに連絡をとって 2007 年秋に会った。一時間程度、彼の話を聞き、工科大学近くのバイエルンの森を 2 時間以上ともに歩いたが、何を話しかけても、ほとんど返事はなかった。と

ころどころ立ち止まって林内を眺めた。全く枝打ちされていないヨーロッパトウヒの人工林、トルコ原産というツリフネソウの仲間が林縁を覆った場所、耐陰性の高いノイチゴの仲間が、北海道のササのように林床一杯に広がった場所であった。「見ろ！」と彼は指さし、そこで簡単な説明を受けた。

そして、ブナとトウヒの壮齢林に横たわる倒木を見つけた時、彼はリュックサックを取り出した。私は“お茶”を期待したが(歩き始めて 2 時間近く経っていた)、出てきたのはウレタン製の座布団であった。倒木に敷いて、「座って森の声を聞け！」という。森と一体化することによって初めて森林美学は理解できるという。

その後、ステルブは自作のカレンダーを送ってきたが、その題材は大部分が人工林を対象にしていた。もちろんドイツは再生させた森林が主体であるが、帯状傘伐更新など施業中の森林と入射光線を写し出していた(図 2)。



図-2. ミュンヘン大学演習林・更新地

その後、シャラーは州有林の最近の植林地を紹介してくれた。そこは、強度の除伐と群状皆伐が施されていた。ドイツの森林には一斉林型を予想していただけない、落葉広葉樹の更新をも期待する森林の扱い方に、現在のドイツの森への姿勢を垣間見た。森林美学発祥の地ドイツ、ミュンヘン工科大学造林学担当であり、自称コッタの思想的継承者 R. Mosandl 教授によると、「森林美学は心理学も含む『高度な体系』であり、重要性は理解するが、今も大学以外で、その大系は続いている。」とのことであった。

1980 年代からヨーロッパトウヒ一斉林の衰退が黒い森を中心に生じ、冬季の風害にさいなまれる南ドイツの森林施業は、伝統的な森林型の他に、

種多様性を維持しつつ生産力を上げる方法も採用していた。そこには、木材生産と狩猟民族である彼らの生活を満たしてくれる野生動物の生息場所でもある森林の、いわば多機能への期待が込められていた。

森林美学の今日的意義 一生態系サービス

森林の多機能への期待は、生態系サービスとして概観することができる(図 3、MEA 2005)。生態系の中での生物と環境との相互作用をまとめて、生態系の働きとして把握でき、これを生態系機能と呼ぶ。この機能のうち、特に人間がその恩恵に浴しているものを生態系サービスと呼ぶ(竹中 2002)。ここでは形がなく、保存したり運ぶことができないものも“サービス”と呼ぶが、実際には木材など物質的な実体のあるものも含める。

物質の供給 生態系が生産するもの 繊維・水 遺伝資源 化学物質	調節的サービス 生態系プロセスの制御によって得られる利益 気候緩和 洪水の抑制	文化的サービス 生態系から得られる非物質的利益 レクリエーション 美的利益・教育
基盤的サービス 他の生態系サービスの基礎となるサービス 一次生産(光合成生産) 土壌形成・栄養塩の循環		

図-3. 森林の生態系サービスの概念図 (MEA 2005)

図3の4つの区分の中で中に、文化的サービスの高度化が包含された体系として、私は「森林美学」を位置づけている。これまで、自らの専門としてきた樹木の光合成機能研究と森林美学の間に大きな隔たりを感じていたが、生態系サービスの概念が提唱されたことで、ようやく森林美学の一端を理解できたように思う。

ここに、森林美学の今日的意義とドイツにおいて「自然林の美学」が刊行され、アメリカでは「経済林の美学」第2版が2008年に英訳された意義を見出す。そこで、本稿をはじめに、恒続林思想の現代的意味(山畑 1984、清水 2006)、森林の空間的規制、混交林への誘導と環境変化(小池 2009b)、巨樹の保護(小池 2009a)、フォレストスケープの視点(堀ら 1997)などを順次紹介する。そして、森林美学の今日的意義を考察し、森林再生へ

の貢献を模索したい。

謝辞: 田村 剛の「森林風景計画」を紹介された鮫島惇一郎(北方林業会)、森林美学に関する議論に真摯に対応下さる伊藤精悟(信大名誉教授)、清水裕子(森林風致計画研究所)、芝 正巳(京大FSC)、森本淳子(北大農)・秋林幸男(北大 FSC)、研究資料を提供下さった筒井迪夫(東大・多摩美大名誉教授)、田嶋謙三(元林野庁)、竹生脩二(元北海道庁)、森林美学のドイツでの展開を紹介されたマルクス・シャラー (TUM 講師)各氏に感謝する。(北海道大学農学研究院)

引用文献

- Cook Jr. W. and Wehlau, D. 英訳 (2008) “Forest Aesthetic, H. von Salisch (1902), Forstästhetik, Jena,” 森林史協会, NC, U.S.A.
- 藤原 信 (2009) 緑のダムを保続, 緑風出版
- 堀繁・下村章男・斉藤馨・香川隆英 (1997) フォレストスケープ—森林景観のデザインと演出, 全国林業改良普及協会.
- 伊藤精悟編著 (1991) 森林風致計画学, 文永堂
- 小池孝良 (2009a) 森林美学における巨樹・巨木の意義, 樹木医学 13:104-105.
- 小池孝良 (2009b) 変動環境下における森林美学考, 森林技術 810:34-37.
- 今田敬一 (1934) 森林美学の基本問題の歴史と批判, 北帝大演研報, 9:1-134
- 木平勇吉 (2006) 森林・林業基本計画への期待, 森林技術 777:1-5.
- 黒松内町教育委員会 (1993) 北の国のヤシ林, 黒松内町教育委員会出版.
- MEA (2005) <http://www.millenniumassessment.org/en/index.aspx>
- 内藤健司 (1993) 林学における統計的手法, 数理科学 51:3-9.
- 新島善直・村山醸造 (1918) 森林美学, 成美堂書店、小関隆祺、復刻 (1991) 北大図書刊行会
- 清水裕子 (2006) 人工林の風致施業のための林相変換の研究—ヒノキ人工林を対象として—, 信州大学農学部 AFS 紀要 4:1-46.
- 清水裕子・伊藤精悟・川崎圭造 (2006) 戦前における「森林美学」から「風致施業」への展開, ランドスケープ研究 69: 395-400.
- 塩田敏志編著 (2008) 森林風景計画学, 地球社
- Stölb, W. (2005) Waldästhetik, Verlag Kessel.
- 竹中明夫 (2002) 国立環境研究所ニュース 20(3)
- 田村 剛 (1929) 森林風景計画, 成美堂書店.
- 田中和博 (1996) 森林計画学入門, 森林計画学会出版局
- 筒井迪夫 (2009) 森林文化学研究—山と木と人の融合—, 林業経済学研究所.
- 山畑一善翻訳 (1984) アルフレート・メーラー, 恒続林思想, 都市文化社